



再臨にある希望を生きる

暗唱 聖句

「だから、愛する兄弟たちよ。堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあっては、あなたがたの労苦がむだになることはない、あなたがたは知っているからである」
(Iコリント 15:58、口語訳)

「わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです」

(Iコリント 15:58、新共同訳)

今週の 聖句

ルカ 18:1～8、マタイ 24章、25章、Iコリント 15:12～19、
コヘレト 8:14、12:13、14、黙示録 21:1～5、22:1～5

安息日 午後 9/7

今週のテーマ

イエスは、私たちが今その一員となることのできる現実として、神の国を宣言なさいました。そしてイエスが弟子たちを遣わされたのは、同じ告知をし、福音を宣べ伝え、他者に仕えることを通して——つまり、ただで受けたものを与えることによって（マタ 10:5～8 参照）——神の国を実演するためでした。

しかしイエスは、神の国が通常とは異なる種類の——「この世には属していない」（ヨハ 18:36）国であり——、まだ完全には実現していないとはっきり言われました。イエスの受肉、奉仕、死、復活によって、神の国は始まりましたが、彼はまた、神の国がこの世の国々と完全に置き換わり、神が完全に支配される時を心待ちになさいました。

その名のとおりに、アドベンチスト——その到来とその王国を待つ人たち——は希望の民です。しかしこの希望は、未来の新しい世界にだけ関係しているのではありません。希望は未来に期待を寄せる一方で、現状を変革します。そのような希望を抱きつつ、私たちは未来に期待しながら今を生き、やがてこの世になると予想される姿にふさわしい方法で変化をもたらすために働き始めるのです。

聖書物語の至る所で、神の民——とりわけ、隷属、捕囚、抑圧、貧困、そのほかの不正や悲劇を味わっている彼ら——が神の介入を繰り返して求めています。エジプトでの奴隷たち、バビロンでのイスラエルの人々、そのほか多くの人たちが神に、彼らの苦しみを見、聞き、このような誤りを正してください、と大声で呼ばりました。そして聖書は、御自分の民を救い、回復するために神が取られた行動の重要な例をいくつも示しています。

しかし通常、このような救済は短期間で、さまざまな預言者が、神の最終的な介入を指摘しました。その時、神は悪に終止符を打ち、虐げられた人たちを引き上げてくださいます。同時にこの預言者たちは、「主よ、いつまで」ですか、と叫び続けました。例えば、主の御使いは、イスラエルの人々の捕囚について、「万軍の主よ、いつまで……憐れんでくださらないのですか」（ゼカ1:12）と。

詩編は、正しい人たちが虐げられ、搾取され、貧しい一方で、悪い人たちが一見、裕福かつ幸運であることへの嘆きであふれています。詩編記者は、現在、この世が神の創造された当初の秩序の中に、つまり神が望まれる秩序の中にないと確信して、神に介入を繰り返して求めるとともに、預言者や抑圧された人たちの叫びを取り上げています——「主よ……いつまで」（例えば、詩編94:3～7参照）。

ある意味において、公正な神を信じる人たちのほうが、不正を耐えがたく感じるものです。公正な神は御自分のすべての民に正義を願っておられるからです。神の民は、この世の悪について常に焦燥感を抱くでしょう。そして見かけ上、神が何もして下さらないことが、焦りのもう一つの原因なのです。それゆえ、時として預言者たちは辛辣な問いかけをしました——「主よ、わたしが助けを求めて叫んでいるのに／いつまで、あなたは聞いて下さらないのか。わたしが、あなたに『不法』と訴えているのに／あなたは助けて下さらない」（ハバ1:2）。

同じ叫び声が新約聖書の中に取り上げられており、そこでは、被造物が救いと再創造を神に求めて呻いているように描かれています（ロマ8:19～22）。黙示録6:10では、この叫び（「主よ、いつまで」）が、神への信仰のゆえに殉教した人たちに代わって取り上げられています。しかしそれは同じ叫びであり、虐げられ、迫害された神の民のために介入してください、と神に要求しているのです。

問1 ルカ18:1～8を読んでください。「私たちのために行動してください」という神の民の度重なる叫びと祈りに、神はどう応じられるのか……。そのことについて、イエスは何とおっしゃっていますか。これは信仰の必要性とどのようにつながっていますか。

宗教は、信者の目を現世から引き離し、より良い来世に向けさせる傾向があるとしばしば批判されてきました。その批判とは、別の世界に焦点を合わせることが、一種の聖化された現実逃避となり、信者たちがこの世や社会にとって利益とならないということです。折に触れて、信者たちはそのような批判に身をさらし、時にはそのような考え方を助長し、説き、実践さえしてきました。

また、権力者たちが貧しく虐げられた人たちに、イエスが戻られるとき、すべては正されるのだから現在の悲しい運命をただ受け入れなさい、と言ったというひどい事例もあります。

確かに私たちの世界は、墮落し、破綻した悲劇的な場所であり、神がこの世を正される時を待ち望むことに何の間違ひありません。その時、神は、不公正、痛み、悲しみを終わらせ、現在の無秩序を神の輝かしく正しい国と交換してください。結局のところ、その希望、その約束がなければ、私たちには何の希望もありません。

この世の終わりに関する説教の中で（マタイ 24 章、25 章参照）、イエスはその前半部分を費やして、逃げる必要を詳しく述べておられます。「神がその期間を縮めてくださらなければ、だれ一人救われない」（マタ 24:22）とまで、踏み込んで言っておられます。しかしこれはむしろ、神のこういった約束の重要性を説明するための序論なのです。将来に対するクリスチャンの希望の「逃げる」側面だけ（あるいは、もっぱらその側面）に焦点を合わせることは、イエスが指摘しておられたもっと深い点を見逃すことになります。

問2 マタイ 24 章と 25 章を読んでください。イエスのこの説教を読んで、何が最も重要な点だと思いますか。主の帰りを待ちつつ、いかに生きるのかということに関するイエスの命令を、あなたはどのように要約しますか。

未来について私たちが信じていることは、私たちの現在の生き方に重要な影響を及ぼします。私たちの世界の未来について神が約束しておられることへの健全な信頼は、活動的な関与を促すもの、豊かで深い人生や、他者に変化をもたらす人生のきっかけになるべきです。

◆ イエスの再臨の希望、約束は、とりわけ困窮している人々を助けることとの関連において、現在の私たちの生き方にどのような影響を与えるべきですか（また、与えることができますか）。

イエスの再臨におけるクリスチャンの希望は、単に明るい未来を楽しみに待つことではありません。初期のクリスチャンたちにとって、イエスが肉体のまま復活されたことは、彼の帰還の約束に確かな現実味を与えました。もしイエスが死者の中から（彼らが自分の目で目撃したように）戻ってくることがおできになったのなら、罪と罪の影響を取り除き、この世を一新するという計画を仕上げるために、主は確かに戻って来られるでしょう（Iコリ 15:22、23 参照）。

使徒パウロにとって、復活は再臨の希望の主要な要素でした。パウロは、彼が説いたあらゆることの信頼性を、イエスの物語におけるこの最高の奇跡に賭ける覚悟でいたのです——「キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく……なります」（Iコリ 15:17）。パウロのこの言葉について、また私たちが期待するすべてのことにとってキリストの復活がどれほど重要であるかについて、考えてください。

問3 I コリント 15:12～19 を読んでください。興味を持っている未信者に、復活の真理がクリスチャンの希望にとってなぜとても重要なのかを、あなたはどのように説明しますか。

復活されたイエスをあかしすることは、最初の弟子たちを変えました。すでに触れたように、イエスは神の国を告げ知らせ、実演するために、すでに弟子たちを遣わしておられましたが（マタ 10:5～8 参照）、イエスの死は彼らの勇気を打ち砕き、希望を叩きつぶしました。その後、復活されたイエスによって与えられ（マタ 28:18～20 参照）、聖霊の到来によって力づけられた弟子たちへの命令は（使徒 2:1～4 参照）、この世を変え、イエスが建国された王国を実現する道へと彼らを導きました。

死の力と恐怖から解放された初期の信者たちは、イエスの名において生き、勇敢に伝えました（例えば、Iコリ 15:30、31）。死をもたらす悪は、苦しみ、不正、貧困、あらゆる形の抑圧をもたらす悪と同じものです。しかしイエスと、死に対する彼の勝利のゆえに、このようなものはすべていつの日か終わります。「最後の敵として、死が滅ぼされます」（Iコリ 15:26）。

◆ 結局、私たちが今だれを助けようと、彼らは最終的に死にます。この厳しい現実、イエスの死と復活の中に見いだせる希望を彼らに知らせることがいかに重要であるかについて、何を教えてください。

問4 コヘレト（伝道の書）8：14を読んでください。ここに記されていることの苛酷で説得力のある現実を、あなたはどのように思いますか。

苦しみ、抑圧、悲劇は、それ自体十分に耐え難いものですが、無礼な振る舞いや侮辱は、もしそれが無意味で注目されないと思えるなら、いっそう耐え難いものです。悲しみの無意味さは、最初の精神的重荷よりも重いのです。犯罪記録や最終的裁きのない世界は、苛酷な不条理の極みです。20世紀の無神論作家たちが、人間の状態の「不条理」について嘆いたのも無理はありません。処罰の希望、裁きの希望、物事が正されるという希望がなければ、私たちの世界はまったく不条理な世界になるでしょう。

しかし、コヘレト8：14の叫びは、物語の終わりではありません。ソロモンは、その抗議の最後で急に方向転換します。無意味さに関する嘆きのさなか、彼は実質的に次のように言うのです——「ちょっと待て。神が裁いてくださる。だから、無意味なものなど何もない。それどころか、今、すべてのもの、すべての人が重要なのだ」と。

問5 コヘレト12：13、14を読んでください。私たちが現世で行うあらゆることがいかに重要であるかということについて、何と述べていますか。

結局のところ、裁きの希望とは、神の中核的性質、人生、私たちが住む世界について人が信じていることに帰着するのです。すでに触れたように、私たちは、神が創造され、愛しておられる世界、しかし墮落してしまった世界に住んでおり、神はその世界で再創造の計画に向けて（イエスの人生と死を通して）ずっと働いておられます。聖書はそう主張します。神の裁きは、この世を正すことの重要な部分です。この世の多くの悪事の被害者たち——置き去りにされ、残忍に扱われ、抑圧され、搾取されてきた人たち——にとって、裁きの約束は確かに良い知らせなのです。

◆ ある日、私たちの想像もできない形で、待ちわびていた裁きが最終的にもたらされることを知っていることは、あなたにとってどのような意味がありますか。

問6 黙示録 21:1～5 と 22:1～5 を読み、ここで描かれている生活がどのようなものであるか、想像してください。罪、死、労苦、涙のない生活を想像することは、なぜ難しいのですか。

罪のあとの私たちの生活に関する聖書の描写は、紛れもなくすばらしく、輝かしいものですが、おそらくは、私たちが待ち受けているものをかろうじて描いているにすぎません。これらの聖句の中においても、その描写は、そこにあるものと同じくらい、そこにはないものと関係しています。この世界が私たちの知るすべてなので、痛みや苦しみ、死や恐れ、不正行為や貧困のない生活を想像するのは困難です。

そこにはこういったものがないばかりか、この描写には人間味が加わっています——「(神は) 彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる」(黙 21:4)。救われた人たちとの関連において、人類史を通じて苦しんできた人たちに対する神の同情は、この1節の中で頂点に達しています。神は彼らの労苦に終止符を打つだけでなく、彼らの涙を個人的に^{ぬぐ}拭ってくださるのです。

私たちは、罪深い生活や、不公正と悲劇の世界によってボロボロにされ、傷つけられているので、黙示録の中に、さまざまな形で罪の犠牲者であったすべての人間にとって、いやしの過程がどのようなものであるかを垣間見ることができます。ヨハネは命の木を描写する際に、「その木の葉は諸国の民の病を治す」(黙 22:2)と説明しています。ここでも神は、人間であるとはどういうことか、この世の悪を感じ、体験し、目撃し、さらにはそれに加担するとはどういうことか、ということへの理解と同情を示しておられます。私たちの世界を再創造する神の計画には、私たち1人ひとりを回復し、いやすことも含まれているのです。

その時まで、私たちはキリストにあつてできることに努め、私たちが提供できるものを必要としている周囲の人たちを助けるために、自分の役目を(その役目は頼りなく、小さいかもしれませんが)果たします。それがどのようなもの(優しい言葉、温かい食事、医療的手助け、歯の治療、服の提供、カウンセリング)であれ、私たちにできることが何であれ、イエスが地上におられたときに示された親切な自己放棄、自己否定、自己犠牲をもって、私たちはそれを行う必要があります。

言うまでもなく、私たちの最善の努力にもかかわらず、この世界はますます悪くなりつつあります。イエスはそのことをご存じでした。しかしこの事実によって、彼は他者を助けることをおやめになりませんでした。そして私たちも、そのことによってやめるべきではありません。

参考資料として、『患難から栄光へ』第30章「競争に勝ち抜くために」、『各時代の大争闘』第41章「千年期と地上の荒廃」を読んでください。

「神のみ声が神の民を捕われの身からかえされる時に、人生の大きな争闘においてすべてを失った人々に、恐るべき覚醒が起こる。恵みの期間が続いていた時、彼らは、サタンの欺瞞に目をくらまされ、自分たちの罪の行為を正当化していた。金持ちは、自分たちは貧しい人々に優越していると誇っていた。しかし彼らは、神の律法を犯してその富を得たのであった。彼らは、飢えた者に食べさせ、裸の者に着せ、正義を行い、憐れみを愛することを怠っていた。……彼らは、地上の富と快楽のためにその魂を売り渡してしまい、神に対して富もうとしなかった。そのために、彼らの生涯は失敗であった。彼らの快楽は、今、苦いものとなり、彼らの財宝は朽ちる」（『希望への光』1918 ページ、『各時代の大争闘』下巻 436 ページ）。

「大争闘は終わった。もはや罪はなく罪人もいない。全宇宙はきよくなった。調和と喜びのただ1つの脈拍が、広大な大宇宙に脈打つ。いっさいを創造されたお方から、いのちと光と喜びとが、無限に広がっている空間に流れ出る。最も微細な原子から最大の世界に至るまで、万物は、生物も無生物も、かげりのない美しさと完全な喜びをもって、神は愛であると告げる」（同上 1930 ページ、同上 467 ページ）。

話し合いのための質問

- ① セブンスデー・アドベンチストの聖書理解によれば、私たちがイエスの再臨に近づけば近づくほど、悪、困難、苦しみは増えると予想されます。そのようなことが起きるとき、私たちはしばしばマタイ 24 章に言及しますが、マタイ 25 章に照らして、私たちはこれらの悲劇をいかに見る必要がありますか。

まとめ

私たちの神は、悪が永遠に続くことをお許しになりません。聖書の最大の希望は、悪に終止符を打ち、不公正を正し、本来の姿に世界を新しく造り変えるためにイエスが戻って来られることです。イエスの復活に基づくこの希望が、きょうを変え、イエスの帰還を待ちながら神と他者に奉仕する私たちに勇気を与えます。